

末黒野

すぐろの

4月号 (通巻824号)



冬はこべ

小川玉泉

一切を水に流しぬ初日影
植ゑ替へし鉢の水仙花盛り
亡き妻の丸座布団と日向ぼこ
まどろみは天与の甘露日向ぼこ

堰類の回収の音寒日和
高階の干し物ゆれず寒日和
木の屑を燃やす暖炉や子の新居
襟元を襲ふ丹沢風かな
方形の畦整然と冬はこべ
姉逝く
三方を冬田の囲み喪の家居
寒を咲く庭のつつじを見られしか
亡き姉の笑顔忘れじ冬ざくら

寒

松本三千夫

竹林の風の姿や初御空
若水を桶に溢らす匂ふまで
風邪の眼に庭木雀の親しさよ
地に降りよ子らと遊べよ初雀
篋の音昂ぶりぬ寒の入
抜け道の寺の境内寒北斗
大寒やシープの芯のすぐ折れて
推敲のペンを投げ出す木の葉髪
光鋭きペーパーナイフ寒灯
尾をぴんと立てて鶴折る四温かな
熟蜜柑四つに割るは考譲り
群れ走る浜の千鳥やこゑ聴かな

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

枯野

安斎久英

細波の呟く 岸辺野水仙
露天湯に音高ぶるや夕霰
冬うらら大島利島目交に
木の葉髪中にひとすぢ曾孫のもの
たもとほる枯野の日矢に心置き
かばかりの物に躓き霜の道
雪の嵩確かめ居りぬ杖の先
大年や選句疲れの膝くづす
ばらばらと来てどつと発つ初雀
初鷄やのんどをぐひと引き上げて

淑氣

大橋伊佐子

ししおどし庭の静寂を深めけり
小春日のいつしか消えし沖の船
大河ドラマ終焉近き師走かな
くつきりと初富士浮かす空の碧
机上まだ一物もなき淑氣かな
亡き夫の歳月憶ふ薺粥
余生てふ氣儘暮しのお正月
力いつばい生きて今あり冬薔薇
鴨たつて河口の暮色動きけり
水眩し鴛鴦の広ぐる思ひ羽根



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



お 降 り

加藤 静江

御 降 り

菅野日出子

土牢の裸電球底冷ゆる
着ぶくれてまどふ香煙義士の墓
山腹の観音像や冬紅葉
街路樹の落葉巻き込む路線バス
到来の手毬毬浮かす雑煮椀
玄関に靴のあふれて今朝の春
オブラートほどの薄氷屋の月

除夜の鐘

堺 昌子

天心に星数あまた去年今年
光満ちて四方より鳥語今朝の春
音の無き白きお降り瑞兆か
純白の初富士しのぐ電波塔
寒風に磨かれ富士の艶姿
寺領寂び鳩の啄む実千両
無縁墓白山茶花の散りつげる

ビル街のひかりのオブジェ冬落暉
乾反葉のつづく参道冬の鴉
川風や波紋ひろぐる鴨の陣
時雨るるや利休鼠の島ひとつ
ひととせの早さ厨に除夜の鐘
腕あぐる嫁手づくりの節料理
青空や霜柱ふむ山がかり

春 隣 中野久雄

孫子らにしきたり伝へ注連飾る
時刻む音の纏はる霜夜かな
大年の更けて瞬く星ひとつ
雲上に浮かぶ富岳の淑氣かな
富士据ゑてとんび高舞ふ初御空
人の輪を押し拵げてやどんどの火
春隣唸り初めたる耕耘機

初日の出 西川みほ

夕富士のいろの寒さとなりにけり
凍つる道歩に齡の差の明らかや
凍雲の居座り富士の景乱す
初日の出望む至福や露天風呂
読初や読まねばならぬもの数多
夫在らば年男とて屠蘇供ふ
初雪や鼻緒のゆるき宿の下駄

おでん酒 森清堯

製材の音の途切れず山眠る
言の葉のあふれて子らの息白し
ポケットに妻よりのメモ冬帽子
いつしかに腕に青あざ十二月
気詰まりをほどくひと言おでん酒
きざはしの照り眩しめり初詣
八方へ日を照り返し寒の芹

千枚田 吉田きみえ

鴨の群れ水脈引く沼の日のかけら
風走り冬深みゆく千枚田
冬の暮れ力なき日を野に残し
街灯の一つ点らず路地寒し
曾孫を抱き柚湯に浸りけり
暮れ早き駅のはき出す靴の音
枯葉舞ふ社への道幾曲り

初時雨

青木由芙

菩提寺の池をとよもし牛蛙
 碧潭に映り山藤盛りをり
 夕さりの絵馬に豆まく庵主か
 天空の城壁険し夏の霧
 笹の葉に翅をたためり黒揚羽
 夏霧の流るる音や白樺
 星空や町を恋しと避暑の子等
 築山の灯にきらり黄金虫
 香を焚き秋扇納む小抽斗
 枝折戸の小さき軋みや萩の庭
 両手上ぐ指揮者のなりやいぼひしり
 林道に肩組む子猿初時雨
 神迎へ鴉声騒がし宮の杜
 書初めの永字八法筆太に
 行く雲と風の音のみ枯野原

瓜きざむ

岩上行雄

眠気さす床屋の剃りや木の芽時
朗読の賢治の童話杏咲く
引売りの誉むる眼の張り桜鯛
登校の列や真中に一年生
早起きや八手若葉の目に著く
ふところの稚拭く母の玉の汗
瓜きざむ音の調子の出でにけり
蟬声の跡絶えたる間や耳の鳴り
嵩張る葉思ひ切り伐る残暑かな
法螺貝を吹く山伏や黄葉山
訃報の夜白きままなる酔芙蓉
児を送り自転車の荷に冬キャベツ
冬咲きの水仙の葉や味如何に
水浴びて禊のごとくし寒の鳩
農道やよろめきつ嗅ぐ狩猟犬

頬杖

卯月十六

癌死てふ子の歔^{きよ}歔^{きよ}かとも春時雨
 水草生ふ藁の切れはし漂はせ
 御仏に導かるるや花の径
 萌黄色被ける残花風雨急
 目覚むれば理髪半ばや春の昼
 短夜の激痛耐えをりにけり
 街路樹の影伝ひゆく梅雨晴間
 居眠りの頬杖崩れ水中花
 縁側に臥すこと多き端居かな
 鉄瓶の音なく滾る夏炬かの川
 故郷の厠は外や天の
 湧く如く稲田を追はれ群雀
 病院のベッドに秋を惜しみけ
 拍手の虚に響き神の留守
 雪吊や園丁白きヘルメット

ゆふづつ

小倉

純

木の芽和梅の絵柄の益子焼
 轉りのるつぼとなりて谷戸の朝
 花の下死せる目白の手に温し
 日矢の射す畔一面の仏の座
 賑やかや去年の巢にくるつばくらめ
 山峡の棚田せましと鯉幟
 雨催ひつと鳴き出づる枝蛙
 暮れてなほ翔びつつ啼きぬ時鳥
 直会の盃積まれ夏祓
 眉の月祭の櫓組み終へぬ
 手花火の爆ぜて子の顔青白む
 交はりて動かず秋の揚羽蝶
 火の島へ水脈引く二艘椿の実
 ゆふづつと並ぶ弦月冬帽
 溪紅葉明治を今に眼鏡橋

ソーダ水

上月智子

大木の山菜萸の風黄金色
 便りの無き子長の旅や初燕
 リラの花束ねて置かれ聖母像
 小心は我がかお主か蛇逃ぐる
 還暦の夫厨房に胡瓜もみ
 駅の奥の小さき画廊や灯の涼し
 ソーダ水の父の通ひし喫茶店
 向日葵や園児の作る泥団子
 風鈴や媼の守る履物屋
 早天や白を極むる酔芙蓉
 長老の舞の軽やか敬老日
 蠟石もて描かれし線路日短
 新巻のや一点睨む面構へ
 寒板の締めの一打の余韻か
 投函口元に戻りぬ小正月

梅雨の蝶

前原マチ

春めくや何やら騒ぐ藪雀
草萌や瀬音ころがる谷戸日和
万雷の梅の大きな木洞抱き
借景に白き富士裾系梅の園
好日や皇居の桜松に添ひ
よちよちの児や雛げしの風の中
溪谷の岩打つ流れ山法師
燈百余降りて爆布のしぶき浴ぶ
草を食む山羊にまつはり梅雨の蝶
敗戦忌半旗掲ぐる老いの家
老鷺や介護施設は窓を開け
和太鼓の大地ふるはせ夏惜しむ
狂ふがに終の鶏頭燃えてをり
独り居や柚子湯の柚子に声かけて
鳴く鳥に応ふる鳥や春隣

雁渡し

新谷フクエ

街騒を呑み込む春の深雪かな
 撫牛の鼻筋光る春の雨
 酒蒸しの貝の口開く春の雷
 茅門を潜るや郁子の花の塵
 牡丹や貫主は白の作務衣召し
 引率の若き教師や麦の秋
 何処までもつづく穂波や麦の秋
 ひたひたの田水に映る夏の雲
 岩たばこの花芯に嵌まり蜂の尻
 山峡の闇の底より湧く蛭
 万緑や湯けむり匂ふふ峡の宿
 焦げ色に乾ぶる藻屑雁渡し
 豊年や棚田を望む蕎麦処
 火の帯となる畦道の曼珠沙華
 菊の香や女黒服黒べー
 ル

島 薄 暑

今村 千年

初 蝶 来 潮 の 香 著 き 異 人 墓 地
 ぼ ん ぼ り に 灯 の 点 り 初 む 夕 桜
 海 風 に 真 帆 孕 ま せ り 夏 は じ め
 城 跡 の 隣 り は 母 校 朴 若 葉
 頼 も し や 山 路 に 出 合 ふ 鯉 幟
 牛 車 よ り ゆ ん た の 歌 や 島 薄 薄 暑 暑
 ど こ か ら か 三 線 の 音 島 薄 暑
 頁 繰 る 和 綴 ち の 湿 り 梅 雨 に 入 る
 奥 深 き 町 屋 の 三 和 土 風 涼 し
 向 日 葵 や 稚 の 笑 顔 に 母 応 ふ
 一 山 の 静 寂 破 り ぬ 鹿 お ど し
 根 気 て ふ 天 与 の 性 や 栗 を 剥 く
 無 残 と も 乱 舞 と も 見 ゆ 枯 は ち
 煮 凝 や 親 を 案 ず る 子 は 遠 く
 頑 に 白 味 噌 仕 立 て 京 雑 煮

げんげ田

高木邦雄

雛の宴酔の芳しきちらし寿司
 船笛の尾を引く港花曇
 鍋洗ふ手元明るき遅日かな
 げんげ田のあふるる花の鋤かれをり
 朴散華香り残れる石だたみ
 緑黛の抱く湖水やほととぎす
 半眼の大仏洗ふ白雨かな
 飛び乗りにて汗と動悸や終電車
 はまなすの能登の浦曲や大没日
 青空に白雲一朵大花野
 小鳥来て声のこぼるる牧の朝
 明六つの鐘の闇縫ふ冬至かな
 底冷えの御堂和顔の菩薩立つ
 初富士や天女舞ふごと雲一朵
 朝練の疲れをいやす初湯かな

花林檎

森 一 枝

落の臺うす紫の衣を解かず
 日溜りに身をほぐすと牡丹の芽
 引鴨や霧立つ池の静もりぬ
 無住寺の古木を根締め黄水仙
 紅のほぐれて真白花林檎
 王妃てふ薔薇の華やぎ画布にこめ
 妹と妣を語りぬ蚊遣香
 对岸の親へ軽鴨の子列なせり
 蓴菜の喉ごしのよき坊泊り
 露草の瑠璃をあしらひ京料理
 母の忌や語りつくせず今年酒
 菊花展父似のひと並びけり
 柏槇の樹下灯すごと実万両
 枝透きて臘梅四方へ香りを
 二尺余のかまくら点す絵蠟燭

風のうた

齊藤マキ子

春風や野辺の草にも花言葉
山椒の棘うひうひし雪解風
荒鋤田四方より桜さくらかな
藤棚に藤の風ある日暮かな
青年の理髪の匂ひ風は初夏
天上に風のあるらし朴散華
開け放つ森の教会若葉風
潮待ちの纜きしむ大南風

路地風にさます酢飯や祭り来る
涼風や欄間に笹の透かし彫り
穂芒の片なびきせり岬鼻
鬼の子の一つ吹かるる小枝かな
野茨の実ばかりとなり風の音
風除けの幕めぐらせて菊花展
枯けやき風樹となるや一日鳴る
日に細り風に曲がりて干し大根
傾ぎつつ戻る牡蠣船風つのも
電飾のとれし櫂や空つ風
柊挿す鬼門は風の通り道
そよぐ丈ありて摘まるる薺かな

年間優秀賞（平成二十六年）

乙矢集

優秀賞

白れんの百花もみあふ空の蒼

森清 堯

青炎集

優秀賞

鱧と答ふ釣人海を向きしまま

岡井マズミ

耕土集

優秀賞

黒革の日記帳買ふ未来買ふ

泉 和美

◆特別作品年間優秀賞作品（平成二十六年）

優
秀
賞

花 氷

及川 照子

黒 塀 の 路 地 や 風 呼 ぶ 釣 忍
料 亭 の 戸 口 の 内 や 蚊 遣 り 香
う か れ 出 づ る 神 や 仏 や 祭 笛
腰 に 差 し 祭 団 扇 の う ら お も て
待 ち 合 は す 毘 沙 門 天 や 白 日 傘
打 水 や 灯 影 の う る む 石 畳
子 ら 触 れ て ほ こ ろ ぶ 笑 顔 花 氷
奥 宮 の 小 さ き 鳥 居 や 蟬 し ぐ れ
路 地 の 風 祭 囃 子 の 曲 り 来 る
猫 遊 ぶ 夕 立 の あ と の 石 畳

青炎集

小川玉泉選



年の夜の闇へ打ち込む法鼓かな

三代の顔の揃ひて屠蘇祝ふ

紅引きて薄紙くはふ初鏡

墨の香を部屋にひろげて筆始

岬鼻の風の硬さや野水仙

干蒲団日差しいつぱい曇みこみ

横須賀

大川 暉 美

横 浜

小 倉 純

横 浜

辻 井 ミ ナ ミ

横 浜

加 瀬 伸 子

天を衝く篝火明し除夜詣 簀守る翁等除夜の白法被

どの径を行くも坂みち恵方道

初茜湾出づる船水脈白し

横浜に育ちし子等と鰯雑煮

鷺歩む田の面に生ふる冬の草

群統ぶる一羽のありや初雀

賀状書き終へて追焚く夜の静寂

青空に透ける鳥の巣冬木立

横 浜

氏神の千木にあまねし初明かり

歌がるた往にし方人の恋に触れ

御手洗の水吐く竜や淑氣満つ

一揖に一揖かはす恵方道

鰹木に大山嵐雪散らす

蕨苞に浮世を隔て冬牡丹

横浜

大霜朔朗

麦蒔の脇を観光バス続く

呼び掛けに驚き鳩の一潜り

花ほどに山吹枯れて黄を尽くす

凧の去りぬズボンに歩数計

凧や遠きラッパの豆腐売

真似をして子等も正座や屠蘇祝ふ

日野

中村月代

けふ句会朔旦冬至てふ日なり

夜回りの褒美の星の増えにけり

茜さす八雲棚引く初明かり

御降りや降りみ降らずみ白きもの

男の子をこの名は七人や箸包

風邪の身の味覚無くとも厨事

横浜

椎名文子

冬晴や土間へ一条日矢の入る

雲一朵車窓に美しき冬紅葉

物忘れ一つに非ず冬薔薇

中腹に藁屋の灯り梢の宿

梁太き谷戸の古民家楯明り

数へ日の量の新たな夕日影

横浜

鍋島武彦

電飾の街や寂しき冬の星

すでに亡き友の名多し名簿冷ゆ

雨戸開け富士を望むも雪催ひ

太々と健の一字や筆始

初御空鳶の笛降る由比ヶ浜

おお寒むと言ひつつ妻の戻りけり

横浜

立野千鶴子

玻璃越しに舞ふ風花や墨絵めき

学帽の遺影に供ふ雑煮膳

連れ立ちて芝生に弾む初雀

美濃和紙の職人芸や初暦

九段坂上る幾とせ老の春

白鳩の発てり真青の初御空

横須賀

牧はるか

新玉の光となりて百合鷗

潤目鰯海の色なす一夜干し

屠蘇一献来春のこと思ひつつ

七日粥二人に卓の広すぎる

女のみの新年会や蕎麦所

寒晴れや雲一片の櫂空

耕 土 集

松本三千夫選



横 浜 佐 藤 喬 風

龍 町 子

豆腐屋の湯気に差しこむ初日かな
掃初や溢るるほどの集積所
地鳴りせる御嶽山の初日の出
鏡餅下げてレシビの一工夫
懷に血圧計や屠蘇祝

着ぶくれを押す駅員の腕かな
書初の俳画に添ふる一句かな
粕汁を二杯平らげ下戸といふ
書初や障害見せぬ筆力
この町に住み古り我と梟と

横 須 賀 齋 藤 眉 山

塩 川 君 子

屠蘇酌みて嚴父の貌となりけり
退屈も寝ころぶもよし三ヶ日
畳みくる波音に揺れどどの火
師のこゑのいとど切なり初句会
つかの間を序の舞のごと風花す

威しても悠然と猫冬日向
闇汁を取り仕切りけり湯気の中
大勢で来て新年の座を乱す
妖怪のメダル大事に賀客の子
初寄席を出でて華やか女どち

横 浜 邑 田 の り 子

谷 島 弘 康

文鎮の位置定まりぬ筆始
絵蠟燭消ゆるまで居き雪女
はんなりと京都訛の初電話
も少しの夢追ふ傘寿初鏡
春芝居浮世離れの夢心地

年でもり今年も同じ道を来し
若水を飲みて醒ませり昨夜の酔
枯れ枯れて裾野を染むる枯薄
自在鉤へゆるる炎や櫓の宿
横顔の愁ひをふくむ冬帽子